

のものにちがいがなかった。海にできることもなく、肌は赤銅色に輝やくこともないが、まだ、眼は、昔の面影を追っている。

潮の匂いはない。海は近いはずだ。国道には、車の排気ガスの匂いが漂っている。海浜地区には、空を突く高層団地群があった。

四角いベランダには、無数の白い洗濯物がゆれていて、夏の光を浴びていた。

X氏は、高層団地をひとまわりして、潮の香りを探して、陽盛りの道を歩いた。倉庫、工場、役所の建物、いかにも埋立地の殺風景な光景だ。地面からいきなり足が突きでているふうな建物群がある。人の気配がない。人工の、砂漠に似ている。街が、人間たちの汗を吸い、生活の場となるのには、20〜30年はかかるのだろうか。

土砂のうねりの中に、白いコンクリートがゆるやかなカーブを描きながら頭を出していた。昔の堤防か、腐ったような木杭が地面に突き刺さっている。立札がある。文字はうすく、読みとりがむずかしいが、眼を擦りつけると、かすかに、貝を勝手に採らないこと、禁止と書いてある。海に至る道はなかった。立ち入り禁止の看板があつて、そこからは、海が見えない。

X氏は、白いコンクリートの上に腰をかけ、遠い、海のあるあたりを眺めながら、左手で煙草を喫った。

どのくらいそうしていただろうか。

X氏は、太陽の力だけを感じていた。夏の光だけがあつた。閉じた眼に光が熱い。光は肌を刺し、白い塩の粉が手や顔の表面に吹きだしている。眠っていた。視力がなくなるまで、夏の光に焼かれたい。静止した材木になって、光を浴び、身体の内まで熱くなり、100日間の長雨の間に溜った一切の水分を蒸発させてしまいたいのだ。数十億の細胞のすべてが、遠い、遠いところから降ってくる光に共鳴して、泡立ち、騒ぎはじめている。光は、いったい何を伝えようとしているのだろうか。左手の甲が痒い。

X氏は、もっとも遠いところから来る光の音信を聴こうと耳をすました。光の洪水がある。物質は恍惚として、光の洪水に応えている。

びくびく筋肉の繊維がふるえている。ビッグ・バンの風が吹いている。光の音楽がきこえる。頭の中に声 flowed.

宇宙に漂流するすべての物質は光の泡なのだろうか。光の化石が時空の幾多の網の目を形成して変容し、移動しているだけの宇宙という世界に、ビッグ・バンの風は多次元を超えて吹きぬけていき、光の泡を撒き散らす力となっているのかもしれない。X氏は、太陽の光に感応しながら、まだ自分のよく知らないもの、意識の間をすりぬけていく得体のしれぬものに対して、手が、細胞が反